奥幅が250cmもある法量の大きな横穴墓も存在しており、第10支群Ｂ－３号穴の奥幅268cmに次ぐ大きさである。また８号穴も開口部から観察した感じでは11号穴以上の規模である。天井形態はアーチ形７穴と家形５穴に分類でき、家形は切り妻が主である。

第２支群は今回10基確認した。そのうち玄室の平面形態または天井形態が判明しているものは８穴である。平面形態は３号穴が正方形を呈し、２号穴が横長長方形の可能性をもつもので、あとの５穴は縦長長方形を呈している。そのうち４穴は羽子板状を呈し両袖の短いものである。天井形態は平面形態が正方形を呈する３号穴だけが切り妻家形で、あとの７穴はアーチ形を呈する。

第３～５支群のうち玄室の平面形態または天井形態が判明しているものは５基である。平面形態は確認できる３穴とも縦長長方形で、天井形態は確認できる５穴ともアーチ形である。

第６支群は今回９基確認した。そのうち玄室の平面形態または天井形態が判明しているものは８穴である。平面形態は３・８・９号穴が正方形を呈し、あとの５穴は縦長長方形を呈している。そのうち１穴は片袖が短い。天井形態は８号穴が寄せ棟の家形、３・５号穴が切り妻の家形で、あとはアーチ形である。

第７支群は今回５基確認した。玄室の平面形態は３号穴が正方形を呈し、１号穴が横長長方形を呈し、あとの２穴は縦長長方形を呈している。天井形態は全てアーチ形である。

第８支群は今回３基確認した。玄室の平面形態は２号穴が正方形を呈し、あとの２穴が横長長方形を呈している。天井形態は１号穴が切り妻の家形で、あとの２穴はアーチ形である。

第９支群は今回19基確認した。そのうち玄室の平面形態または天井形態が判明しているものは15穴である。平面形態は１２号穴が正方形を呈し、４号穴が横長長方形を呈し、あとの13穴は縦長長方形を呈している。そのうち１穴は無袖、２穴は片袖、２穴は両袖が短く、１穴は片袖が短い。天井形態は１２・１９号穴が切り妻の家形で、あとはアーチ形である。

第10支群（Ｈ～Ｊ群）～12支群のうち玄室の平面形態または天井形態が判明しているものは６基である。平面形態は第12支群１号穴が正方形を呈し、あとは縦長長方形を呈するが、第11支群１号穴は無袖である。天井形態は第10支群Ｉ－１号穴は寄せ棟の家形、第12支群１号穴は切り妻の家形で、あとはアーチ形である。

以上各支群の玄室形態を概観したが、以前から言われているように、各支群とも平面形態縦長長方形、天井形態アーチ形を呈するものが主流を占めていることが再確認された。玄室の前壁に当たる袖部分が不明瞭である横穴墓が少なからずあることも特徴である。それは平入りの横長長方形の横穴墓に比較すると妻入りの縦長長方形の横穴墓は狭い部分を開口部とするために、奥へ掘削しようとする意識が高いため両袖が不明瞭となると考えられる。天井形態が家形を呈するものには、平面形態が正方形、横長長方形、縦長長方形の３形態あるが、正方形を呈するものが多い傾向にある。

註１　後述するが、昭和35年12月に福知寺山横穴群という名で市指定文化財として登録がしてあるため、今後もこの名を支群名として扱う。

註２　梅原末治・石倉暉榮「簸川郡知井宮村の横穴」『考古学雑誌第十一巻第三巻』1920（T９）

註３　今回筆者の怠惰により遺物には当たっていない。

註４　山本　清「第九章 山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』1971（S46）『島根大学開学十周年記念論集』1960（S35）収録のもの、以下第７章第１節の時期区分はこれによる。

註５　これに従い、第１支群を福知寺山横穴墓群とした。

註６　今回第７章第２節に掲載している神門横穴墓群の実測図は、西尾・原田両氏の多大なるご厚意により、平成３年に同氏らの実測された図面を掲載させて頂くこととなった。紙面を借り、深く謝意を表します。

註７　一覧表作成に当たっては、今回の分布調査で土砂流入などで確認できなかった横穴墓も、西尾・原田などの調査記録資料を筆者の判断によって活用している。また両氏には第１～７・12支群の分布調査に立ち会って頂いた。

註８　第１支群の他に第２・６～８支群でも玄室内部で連結している横穴墓が存在する。第７支群１号穴と２号穴は全開状態で２室あるように感じるほどである。

註９　19号穴については地主の梶谷氏からの言である。またその時、羨門上中央には椀状の丸い凹みがあったらしい。

参考文献

野津佐馬之助『島根縣史 四 古墳』1925（T14）

神門村役場『神門村誌』1956（S31）

池田満雄『出雲市の文化財－出雲市文化財調査報告第二集－』1960（S35）出雲市教育委員会

美多　実『島根県遺跡目録－島根県埋蔵文化財包蔵地調査報告書－』1962（S37）島根県教育委員会

文化庁文化財保護部『全国遺跡地図 32 島根県』1978（S53）

島根県教育委員会『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980（S55）

門脇俊彦『島根県大百科事典下巻』1982（S57）

西尾克己・大国晴雄「西出雲の古墳とその社会」『えとのす 19』1982（S57）

島根県教育委員会『島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）』1987（S62）

川上　稔『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』1989（S64）出雲市教育委員会

西尾克己・丹羽野裕「山陰の横穴墓」『おおいた考古第４集』1991（H３）

西尾克己・原田敏照・守岡正司『湖陵町誌研究１』1992（H4）湖陵町教育委員会

島根県教育委員会『増補改訂 島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）』1993（H５）

湯村　功『出雲市遺跡地図』1993（H５）出雲市教育委員会

おわりに

小浜山横穴墓群として調査した35基の横穴墓について報告を行った。玄室の大半がすでに崩壊していたものもあったが、遺物の残っていたものも多く、横穴墓の形態変遷や分布の特徴などがある程度把握することのできる良好な資料を提示できたのではないかと思われる。

小浜山横穴墓群の存在する真幸ヶ丘丘陵一帯には多くの横穴墓が存在することが古くから知られており神門横穴墓群と呼ばれていることから、神門横穴墓群の現状についても合わせて整理を行い、小浜山横穴墓群も神門横穴墓群の一支群として捉えることとした。しかしながら、神門横穴墓群の周辺には地蔵堂横穴墓や神待山横穴墓群など10基程度からなる横穴墓群が知られており、これらと神門横穴墓の各支群との差異などは充分検討することが出来ず、その差を明確にすることはできなかった。複数の支群が一箇所に密集する神門横穴墓群や上塩冶横穴墓群とその周辺の一支群程度からなる横穴墓群など横穴墓群の形成のしかたの違いについてはこれからの課題である。

また、今回の調査は神門横穴墓群で行われた初めての本格的な調査であり、神門横穴墓群など神門川左岸の凝灰質砂岩に掘削される横穴墓と上塩冶横穴墓群など凝灰岩に掘削される横穴墓との形態や掘削技法などの差もあきらかになってきた。

神門横穴墓群・上塩冶横穴墓群とも出現時の出雲４期では凝灰質砂岩に造墓している。玄室形態はいずれも縦長長方形プランアーチ形で、袖の形態が不明瞭な徳利形を呈するものもどちらの横穴墓にも存在している。礫床なども共通の要素といえる。導入期の特徴は各横穴墓とも共通したものであるといえよう。

これが出雲５期以降は上塩冶横穴墓群では凝灰岩に造墓がなされるようになり、玄室形態は正方形プラン寄棟家形になる。造墓される地層の変化だけではなく、玄室形態やこれにともなう掘削技法もアーチ形とは大きく変わることになる。神門横穴墓群でも天井形態を家形にするものがあらわれるが、これらはアーチ形の基本形に細部加工を施したアーチ系の家形で、基本的な掘削技法には大きな変化がないことがわかる。この時期の両横穴墓群に共通するものとして、石床と石棺があげられる。出雲５期の石棺・石床は上塩冶・神門横穴墓群とも凝灰岩製の規格化されたものを使用しており、おそらく一元的に製作・配布されたものであると考えられる。

出雲５期には玄室形態や石床・石棺の有無など横穴墓にも多様性がみられるようになる。おそらく副葬品にも差が生じていよう。このような差が被葬者のどういった差によるものか、また横穴墓群における差はどのような集団差を反映しているのかということは究極的な課題であろう。

当然のことながら、横穴式石室を持つ首長墓が上塩冶・神門の両横穴墓群の周辺には知られており、これらの動向と合わせて横穴墓の変化も考えていく必要があろう。

十間川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

小浜山横穴墓群 I

（神門横穴墓群第10支群）

— 本　編 —

1995年3月

編集・発行　出雲市教育委員会

印刷・製本　株式会社武永印刷